

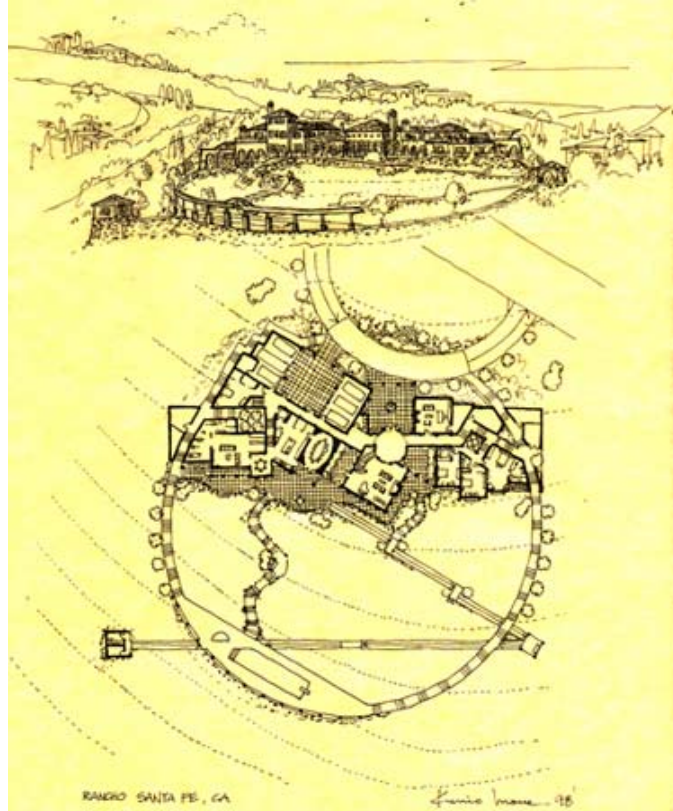
7 建築家の苦楽

7. 2 建築家の喜び、コンペでの勝利

建築家の最大の喜びのひとつは、指名コンペ（競技設計）に選ばれ、それに勝つことである。私にも、チャンスがいくつかあり、勝利したこともあった。その一つは、ランチョ・サンタフェでのコンペでの勝利だった。

1990年、ロサンゼルス南、サンディエゴ郡のランチョ・サンタフェ市の、大きな開発計画であった。それは市の郊外の丘の上に、高級住宅地、ゴルフ場、スポーツ・センターを作るという計画だった。総費用は日本円にして、約20兆円の大プロジェクトだった。そのコンペは、その中に1件あたりの床面積約300坪の大住宅を設計する、国際コンペであった。面接と書類選考で、7社の設計事務所が選ばれた。選ばれた建築家はアメリカ人が5人、メキシコ人が1人、日本人では私1人であった。ディベロッパーから、いろいろな設計条件が出された。家のスタイルや、プレゼンテーションの方法まで指示してきた。私は4輪駆動車に乗って、1日かかりで、丘の上の未開発の土地を調査した。この丘の上からは、西には太平洋、東には雪をかぶった山がよく見えた。またサンディエゴのダウンタウンや、近くの街々まで見渡すことが出来た。360度の眺望であった。付近の丘にも登り、この丘を見た。周囲の街々からも、この丘を見上げた。

私は、開発する新しいコミュニティーのイメージを考えた。ランチョ・サンタ・フェ市はアメリカで最も高収入の金持の人達が住んでいる街である。ディベロッパーの意図するところは、金持らしいイメージを出そうということにあった。ディベロッパーとしては次のような家を建てることを望んでいると書かれた手紙と写真が送られてきた。アメリカ南部のプランテーションハウス、英国のツドースタイルの家、ビバリーヒルズにある豪邸などの写真である。



コンペ、ランチョ・サンタ・フェ、住宅設計コンペのスケッチ



ランチョ・サンタ・フェの山は地形も気候もイタリアの地中海トスカーナ地方に良く似ていた。雨も少なく、岩の地層なので大きな木は生えていなかった。



ランチョ・サンタ・フェの麓にある南カリフォルニアのパナキユラアーキテクチャー（その地方固有建築）の住宅



ランチョ・サンタ・フェの山の上の敷地からは、太平洋の海、遙かかなたにはサンデゴ市の超高層のビル群がよく見れた。敷地からの眺望、夕日に映えての波打つような山肌と一直線の海は絶景であった。

その上、そのころはまだコンピューターで図面を描くアーキテクトはほとんどいなかったからプレゼンテーションの図面の仕上げはマジックマーカーで仕上げることも書かれてあった。

私のイメージするところとは、大分違った。参加した他のアーキテクトは、すべての設計条件を受け入れた様であった。私も受け入れて、コンペに勝つ為の設計を考えた。コンペに参加する以上、絶対に勝たねばならない。2番になっても何の意味もないのだ。しかし、自分の意図することに反して設計して、たとえコンペに勝つことが出来たとしても、どうなるのだ？ それに、勝つとは限らない。7対1で負ける可能性の方が強い。勝つ為に自分の意図に反して、ディベロッパーに言われたとおり設計して、負けた時は悲劇である。私は決断した。ディベロッパーの設計条件を無視して、自分のコンセプトで設計することにした。私は、自分の決意をディベロッパーに話した。相当の時間を費やして設計するのであるから、私は自分の意図するコンセプトで設計したい。そしてプレゼンテーションは水彩画と色鉛筆で仕上げる。もしそれが許されないなら、このコンペから降りることを話した。私としては、大きな賭けであった。後日、ディベロッパーから私の好きな方法でやってもよい、という電話があった。それまでどうにも動かなかったエンピツがどんどん動きだした。指とエンピツが案を描き出した。南カリフォルニアは地中海気候によく似ている。私はこの丘を見た時、イタリアの中世の山岳都市を思い出した。この丘の上に、

**ランチョ・サンタ・フェの山の上の敷地の断面図。
通常、建築の断面図は平面図以上に建築の意図を物語ってくれる。**





ランチョ・サンタ・フェの山の上の平面図。

敷地が大きく、なかなかアイデアが出てこなく鉛筆でぐるぐる描いているといつの間にか円形の形が出てきた。山の上の道からの車寄せの道は半円形になった。リムジンの車も含めて6台分の車庫を作った。車寄せのところに噴水付のコートヤードも作った。(これもパナキユラ建築のひとつである。) 海への眺望を各部屋から見られるように平面図を横に延ばすようにした。急斜面の大きな敷地をほとんど全部歩けるように円形の階段つきの歩道の作り、そのリングとなる一番低い所にプールとスパも作った。ファミリールーム、リビングルーム、ダイニングルームなどの各部屋からは車椅子を使っても折れ曲がった真っ直ぐなスロープを下っていくとプールまで行くことができる。野生の動物、狼、狸、ポッサムなどの侵入を防ぐために円形の歩道に沿って柵も設けた。

ディベロッパーが意図する様な大きなヨーロッパ風のお城や、アメリカ南部のプランテーションの様な家を作るのは間違っている、と思った。大きな家であっても、自然と一体となる様な住宅でなければならない。私は、ビレッヂ的な家とコミュニティーを作るコンセプトでいくことにした。こうゆう高級住宅地には結構年配で車椅子を使う人も住むに違いないと思ったから、斜面地に建つ住宅でも、車イスですべての所に、上り下り出来るようなプランを作り、敷地の一番低いところに作ったプールにも車椅子でいけるように配置図を設計した。そのプールに行くと大きな自分の家全体を見渡すことも出来る。プールは泳ぐだけでなく、水中にライトを入れると大きな庭の夜景はさらにきれいに見ることが出来る。家の中にもスロープやエレベーターもつけた。たくさんある各室からは、異なった眺望が見られる様に各部屋の角度を変えて設計した。こうして、現代版の自然と一体となった山岳都市の大きな住宅が出来上がった。

プレゼンテーションの当日、すでに提出された各建築家の図面がロビーに展示されていた。私は、それらを一目見た時、ショックを受けた。きれいな色付きの、プレゼンテーション・ドローイングである。これは負けたかな? と思った。しかし、ひとつひとつの案をよく見てみると、たいした案ではなかった。中味は充実していないし、うまくまとまってもいない。彼等は図面をきれいに描いただけなのだ。アメリカではこうゆう図面を”Eye Wash Drawing”と呼ぶ。“目を洗うように綺麗に見える図面”。その上に、彼等の英語は実に流調で、プレゼンテーションも上手だった。私も、7人の審査委員の前でプレゼンテーションをすることになった。その審査委員はランチョ・サンタ・フェ市の建築委員長、サンディエゴの建築家協会の会長、サンディエゴ大学の建築学科長、ディベロッパーの社長、その他の人も又、建築に関するプロばかりであった。審査員の持ち点は各50点で、最高点



ランチョ・サンタフェのコンペの最優秀案とそのパーティーでの授賞式。

は350点になる。

ちょうどその頃、日本の多くの企業がアメリカに進出し、その影響を受けてアメリカの多くの会社が倒産し、失業者が増えてきて、深刻な問題が起こっていた。ワシントンの議事堂の前で、アメリカの政治家達が日本の電気製品を大きなハンマーでたたきわって、日本製品を買うなという、そういうニュースが報道された。日本からの輸入製品の理由で倒産した会社の様子もテレビに映し出されていた。アメリカ全土に、“日本たたき”のムードが漂っていた。私は、自分の案に自信を持っていたが、そうした状況を考えて、一番になるのは難しいかなと思った。私は負けてもいい、と思ったから、思っていること、言いたいことを図面の中に表せないことを話してしまった。“この山の開発は物理的にはオーナーのものだが、実際にはオーナーだけのものではなく、周りにすんでいる人たち、この山の住宅地を見ることが出来るすべての人たちのものでもある。それはこの街があってはじめてこの山のコミュニティーが存在できるのである。”とまで言ってしまった。ちょっといろいろのことを言い過ぎてしまった気がするが何となく気持ちが良かった。

翌日、ディベロッパーのオフィスから電話があった。私の作品は335点で1番となった、という。2番の作品は、285点ということであった。そして、翌週、サンディエゴの大きなホテルで、表彰式と共に大きなパーティーが行われた。私は、25,000ドルの賞金と、名前の入ったピラミッド型をしたトロフィーの賞をいただいた。

www.kiparchit.com